

## 目から鱗

久保 亮治

魚鱗癬というが、魚のウロコ(鱗)は角質ではない。たとえば金魚(硬骨魚類)の鱗は真皮内にあるカルシウムに富んだ構造物であり、鱗の外側に重層上皮細胞からなる表皮がある。この鱗は進化上どこから来たのかというと、1つの説は楯鱗が退化して真皮内にとどまるようになったものとされている。楯鱗は現在では軟骨魚類であるサメの皮膚にみられる、表皮を貫いて真皮から飛び出す構造であり、われわれヒトの歯に似た構造をもつ。一方、角質でできた鱗は爬虫類や鳥類にみられる。ワニ革の財布の鱗模様やヘビの鱗は角質でできている。われわれヒトの皮膚の柔らかい角質と異なって非常に硬い角質であるが、これは角質をつくっているケラチンが、ヒトとは異なりハードケラチンからなっているからである。一方、ヒトの目の角膜は表皮と同じく重層上皮細胞からなるが、角膜の表面は角化していない。角化すると角質は光を乱反射してしまうので視力を得られなくなってしまうのだ。なので「目から鱗が落ちる」というが目には本来、鱗はない。固定観念のような余分なものが「鱗」となって目に入ったままになっており、何かのきっかけでその固定観念から解放されたようなときに、まさに目から鱗が落ちるのだと思う。しかしここには落とし穴がある。

「目から鱗が落ちたのと目に鱗が飛び込んだのは、どこで見分けるんだ？」そう述べたのは、SF作家の故・星新一氏である。これは私の座右の銘の1つであり、この相対的な視点を常にもつように努めることがとても大切だと考えている。初出は『SFマガジン』(早川書房)の1968年2月号とのことなので(私はまだ生まれていない)、この言葉が印象に残った方がほかにもおられて、その引用を読んで印象に残ったのだと思う。

世の中を見回してみても、たとえば新興宗教にハマるとか、陰謀論に染まってしまうとか、それは本人にとっては「目から鱗が落ちる」体験を通じてハマっていくものと思われるが、周りからみれば「目に鱗が飛び込んだ」としか思えない現象である。サイエンスにおいてもこれはまったく同じだと感じる。観察された現象を解釈していくのがサイエンスの1つのお作法であるが、まったく間違えた解釈をしてしまった(目から鱗が落ちたと思ったら、実は鱗が飛び込んでいた)ために砂上の楼閣をつくりあげてしまい、最終的に何年もの努力が無に帰してしまうような例は、サイエンスの歴史の中にいくつもみられる。近年でも、分化した細胞のリプログラミング研究において多数みられたと思う。自分だけはそんな落とし穴には嵌まるまいと思っていても、思わぬ落とし穴というのはあるものである。目に飛び込んだ鱗に気づくためには、とにかくあらゆる可能性を考え、観察された現象を説明するために別の解釈はできないかということを考え抜くことが大切である。

これは臨床においても同じだと思う。そのために、われわれはできるかぎりの鑑別診断を考えるのだ。